

わたしの好きな よりのい

No.140

今月号で皆さんにご紹介する写真は、立ヶ瀬にお住まいの小菅久男さん宅のクリスマスイルミネーションです。星、SLなど様々な形に飾り付けされ、LED（発光ダイオード）がブルーやホワイトに光り輝くお庭は、さながら小さなテーマパークのよう。

小菅さんに、飾り付ける際の苦労話やイルミネーションにまつわるエピソードを伺いました。「飾り付けは、点灯時をイメージし、ワクワクしながら作業を行なうので苦になりません。今年の飾り付けは6日間ほどで完成しました。また、去年のクリスマスにこんな出来事がありました。夜、わが家のインターホンが鳴り、それに応えると“サンタです”と言う声が…。慌てて外へ出てみると、そこには一人の見知らぬ女性が立っていました。その女性は、“いつも素敵なイルミネー



<Xmas イルミネーション2007>

ションをありがとう…。癒されます”と言って、私にケーキをプレゼントしてくださいました。おとぎ話のようですね！」と小菅さんは話してくださいました。

イルミネーションは、クリスマスまで飾り付けてあるそうです。皆さんも光が織り成す幻想的な空間を一度ご覧になってはいかがでしょうか。

他にもクリスマスイルミネーションが施された素敵な空間がありましたら、ぜひ情報をお寄せください。



わが町の 達人

たご 凧づくりの達人 No.9



堀口義夫さん (今市)

冬空に30畳の大凧が舞い上がり、観客からどっと歓喜の声が上がる。唸り舞う凧のロープが、全身にそのすさまじさを伝えてくる。「大凧揚げ」とは、まさに危険と隣り合わせの作業であり、地上に戻るまでは、一分の油断も許されません。それくらい風の力は強いのです。

今市大凧の会が発足したのは、今

このコーナーは、「寄居生活学の達人」として町に登録をいただいている町民講師の方々を中心に、そのうちくちや技術、体験などを町民の皆さんに紹介するコーナーです。

から9年前で、会員の中に「凧のメッカ」滋賀県の出身者がいたため、モデルは「八日市凧」です。「八日市凧」とは、300年の歴史を持つ国の選択無形民族文化財で、特徴はとにかく巨大であるということです（100畳の大きさはごく当たり前です）。我々は最初、2畳の大きさから取り組み、以後、徐々に大きな凧に挑戦し、現在の大きさになりました。凧をうまく揚げる秘訣は、凧につける吊り糸の加減です。吊り糸は数十本にもなり、その時の風の向きや強さをみて、一本づつ張り具合を調整するのです。また、製作工程での難関は、骨組となる青竹を裂く技術です。長さ7メートルを越える竹をまっすぐに幅5~6mmに裂くのは、非常に困難であり、熟練の技が必要なため、現在は専門の籠屋さんに依頼しています。

秋の気配が近づくと、誰いうことなく自然と「凧会館」に会員が集まってきます。「凧会館」とは我々会員の手作り、大凧作製の拠点とな

っています。館内での作業は寒い季節のため、ストーブが設置されていて、このストーブを取り巻き、凧談義やら世間話、情報交換等ついつい話が弾んでしまいます。30人の会員同士が兄弟のように打ち解け、凧を通じて得られたこの深い絆をいつまでも大切にしたいと思います。

現在は、来年の元旦に向けて過去最大（36畳）の大凧を製作中です。どうぞ皆さん、元旦には寄居運動公園での今市大凧揚げを見物に来てください。会員一同お待ちしております。



作業風景
~36畳の大凧の骨組~